

令和元（2019）年 9 月 13 日（金） 大会二日目

15:00～16:30

セッションE3 働き方 23302 教室

座長 川崎一泰（中央大学）

近藤明子（四国大学）

[E3-1](#) 窯業都市における焼き物組合の役割とそのあり方に関する考察—常滑モデルと篠山モデルの比較から—

○立花晃

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター

[E3-2](#) AI は社会をどのようにかえるか—社会関係資本の視点からの検討—

○稲葉陽二

日本大学

[E3-3](#) モリス的ユートピアにおける芸術と労働の関係性について

○柊島利久 坂野達郎

東京工業大学 環境・社会理工学院

窯業都市における焼き物組合の役割とそのあり方に 関する考察～丹波篠山モデルと常滑モデルの比較から～

A Study on the Role and Directionality of the Pottery Association in the City of the Ceramic Industry- Through Comparison of Tokoname Model and Sasayama Model

○立花 晃（龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC））

1. はじめに

生活文化産業のひとつである“窯業”を中心的な地場産業とする日本六古窯の都市では、それぞれ焼き物の流通に関して、“組合”の存在が重要な役割を果たしてきた。

しかし近年、そうした都市では、後継者不足や市場の縮小、質的変容により、地場産業としての窯業の存続が次第に危うくなってきている。そのような危機に際して、焼き物組合が若手作家を中心とした新たな商品開発、などの取り組みや、後継者の教育、育成、異業種との交流、製品の流通のハブなどの機能と役割を担いつつある。

そこで本研究では、組合組織のあり方の改革を行いながら再生を目指す窯業都市における焼き物組合をとりまく各主体間の関係と市場構造、今後新たなギルド社会を志向する窯業都市における焼き物組合の組織のあり方について二つの組合モデルの比較を行いながら考察する。

2. 研究の対象と方法

本研究では、生活文化産業としての窯業と、それを育む「日本六古窯」市町野内、篠山市（現：丹波篠山市）と常滑市に注目し、そこに潜在する焼物組合を中心とした地域社会連関モデルのもつ特性を明らかにすることを目的とする。「生活文化産業」は、伝統的工芸品産業とは少々異なり、徒弟制度や同業者組織の締め付けは緩く、コミュニティが比較的開放的で新規参入に寛容である。本研究は、そうした新陳代謝や異業種間の活発な交流が地域の再生力につながる—という仮説に立脚している。生活雑器に属する陶器を産する「日本六古窯」各市町に存在する焼物組合は、窯業と地域を繋ぐメゾな領域の中でクリエイティブ・ハブとなり得る典型的な事例にあたると思われる。

本研究では、①これまでの創造都市論が扱って来なかった領域である「生活文化産業」としての窯業に注目し、②それらを擁する市町において焼物組合を中心とする新たな地域社会連関モデルを構築することにより、③それらの特性を分析することで、④焼物組合がどのような機能を発揮すれば、地域のメゾの領域の中で創造性が顕在化するのを明らかにする。本研究の根底には、創造都市の先行研究が対象にしてきたような都市群だけではなく、あらゆる都市や地域が創造性を育み、発揮することのできる潜性

力に恵まれているはず、という確信がある。本研究では、主に現地フィールドワークと、関係各主体に対するヒアリング調査を中心として行い、焼物組合を中心とした新たな主体間の関係性モデルを構築する。そして、それらを比較考察することで、それぞれの特性にもとづいた新たな焼物組合の役割を明らかにする（図1）。

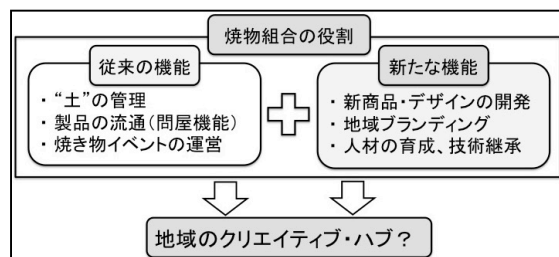


図1：新たに想定される焼物組合の役割

3. 先行研究と本研究の射程

2010年代以降、欧米に学び、我が国でも「創造都市論」が都市再生を目指す都市思想として風靡し、文化経済学などの分野で一定の学術的評価を得てきた。しかし、これらは、政策レベルのマクロな視点や、地域の作家・職人の実践といったミクロな視点からの研究が多く、その中間であるメゾ領域の主体や施設についてはほとんど研究されてこなかった。たのほ、高付加価値志向の強い先端芸術や伝統工芸産業であり、日々の暮らしで使われる生活雑器／生活着などを含んだ「生活文化産業」（経済産業省,2010；日本ファッション協会,2009など）の中でも、地域の農業や食文化と密接に繋がる「窯業」や、焼物組

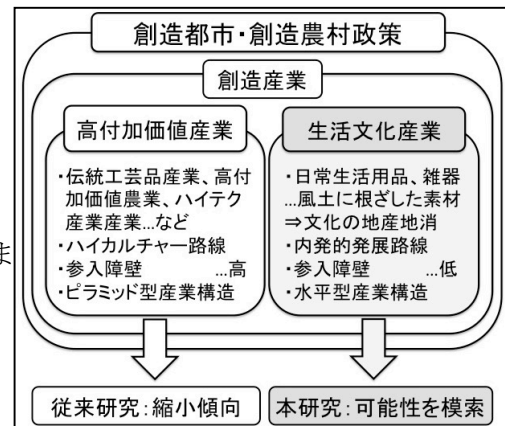


図2：本研究の射程

合については、メゾの領域という文脈で扱った研究はほとんどなされていない。

本研究でメゾ領域の事例として取り上げる焼物組合は、これまで焼物の流通や陶器の原料となる

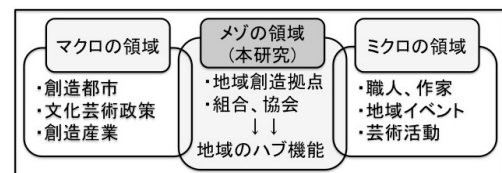


図3：本研究の扱う領域

“土”の管理、問屋機能等を担ってきた。しかし近

年、窯業組合は地域ブランディングや若手作家の人

材育成、他の文化芸術、産業、情報技術などとの協

働や、新商品開発、海外への新たな販路開拓など、これまでになかった地域のクリエイティブ・ハ

ブとしての新たな機能を果たし始めていると思われた。本研究で「窯業」および焼物組合に着眼したのは、メゾ領域の地域特性モデルの構築と、そうしたモデルの他分野への応用に適しているからと考えたからである。

このように、欧米の事例に学び輸入された「創造都市論」や「創造農村論」では、マクロな領域である政策レベルの研究や、一方で、地域での個別の実践などを取り上げた数多くの論考がなされてきた。しかし、本研究では“内発的發展論”を踏まえ、生活文化産業について、焼物組合を中心とした域内人材連携と独自の地域経済・流通システムに着目する。そして、マクロ、ミクロの領域の間に存在する、両者を繋ぐ媒介としてのメゾ領域を扱い、地域社会連関における焼物組合を中心としてモデル化し、比較考察する。

また、生活文化産業全体でも軒並み下降傾向にあるが、特に窯業分野では、この10年間で6割超もの 国内市場を失い、各窯業都市の創造産業従事者は窮地に立たされている（（独）日本貿易振興機構,2009）という現状があるが、これらの再生への処方箋に繋がる特性モデルを示すことで、下記の二点のような研究成果を導き出す。

- (1) 創造農村論など、従来の創造都市論や文化産業論における研究領域が扱ってきた“高付加価値産業”ではなく「生活文化産業」を扱うことで、地域の地場産業による新たな形での再生の可能性を探る。
- (2) 「六古窯」の場合、単に窯が集積しているのではなく、域内の異業種（食文化、農業、漁業、茶の湯、生け花など）の間に仕事の交流がある。そうした焼物組合を中心（＝ハブ）とした紐帯が地域の強みになっている。これらを応用可能なモデルとすることで汎用性の高い知見を導く。

4. 日本六古窯について

「日本六古窯」とは中世六古窯のことであり、日本古来の陶磁器窯の内、鎌倉時代より現在まで生産が続く代表的な6つの窯業地域（瀬戸市、常滑市、越前町、甲賀市、篠山市、備前市）の総称である。これまでに、六古窯産地の首長が一堂に会し、シンポジウムや交流事業などを行う「六古窯サミット」が計13回開催されている。そして、昭和63年篠山市で開催の第1回以降、六古窯の所在する市町間の友好と連携を深め、固有の窯業を擁する陶都共通の焼物を生かした地域産業の活性化を図っている。また、“縄文時代から続いた世界に誇る日本古来の技術を継承している”として、六古窯にまつわるストーリーを日本遺産に申請し、平成29年4月に認定を受けた。「日本六古窯」各市町は、いわゆる高級陶磁器の産地ではない。日用の陶磁器市場では現在、美濃焼が圧倒的なシェアを握っているが、六古窯市町間で技術交流、イベント共催などを繰り返し広げている。六古窯市町は、茶道具などの流通拠点であった京都を中心に半径250kmに点在し（図4）、現在まで都（京都）を中心とする焼物流通の拠点となっている。本研究の現地調査では、日本六古窯に位置する市町における生活文化産業としての窯業と、①焼物組合、②窯業従事者である職人、陶芸作家などの実践主体、③文化施設および窯業関連施設、④行政内の窯業関連所管部局、各市町の窯業関連政策、事業を主な調査対象とする（図5）。

六古窯市町をめぐる近年の特徴としては若年層、あるいは子育て世代のUIターンなどの回帰現象が起きている。輸出市場の開拓努力も観察される。新奇なデザインの陶器類のマーチャンダイジングも珍しくない。そうした新しい動態の中で、焼物組合が中心となり連携／協働が創出されつつあり、新たな形の組合モデルとなる。

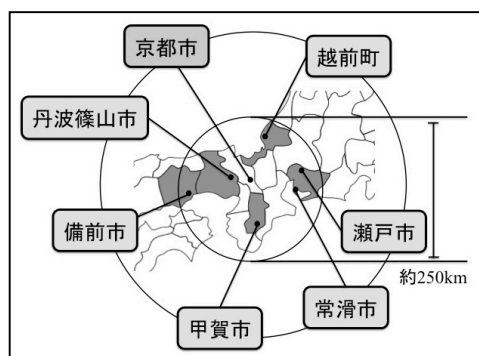


図4：対象市町の位置関係

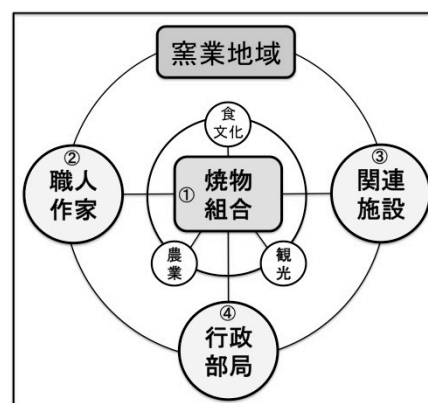


図5：フィールドワーク・ヒアリングの実施対象

5. 篠山モデルと常滑モデルの構築

これまでに六古窯市町（常滑市、越前町、備前市、甲賀市、篠山市（現：丹波篠山市））、について、各市窯業に関する生産形態と、生産品の傾向についてヒアリング、アンケート調査を行った。調査対象は下記の通りである。

- ① 対象各市町の窯業・焼物組合の行う事業、② 職人・作家の作陶活動、③ 対象各市町における焼物関連文化政策、文化施設の実践、④ 行政所管部局の施策・事業

この、現地調査により、生産品の傾向と窯業従事者の形態の観点から、A群（丹波篠山市が中心）とB群（常滑市が中心）の2タイプに分類することができた（図6）。

また、本調査では、A群に類する篠山市とB群に類する常滑市における、焼物組合及び生活文化産業政策に関する所管部局、窯業従事者及び現地での実地調査から、図7、8の様な各主体間の関係性モデルを導き出すことができた。

さらに、地域の窯業組合と、それを取り巻く諸実践主体について整理し、各々の関係性を整理すると図9、10のようなモデルを導き出すことができた。

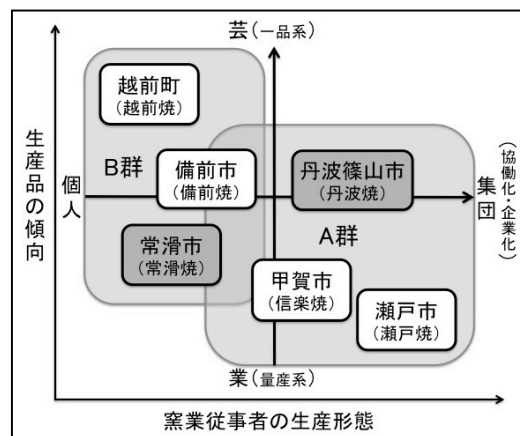


図6：六古窯における窯業のタイプ分類

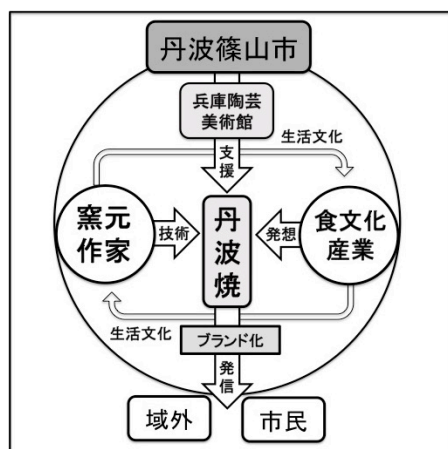


図7：丹波篠山市の主体間関係図

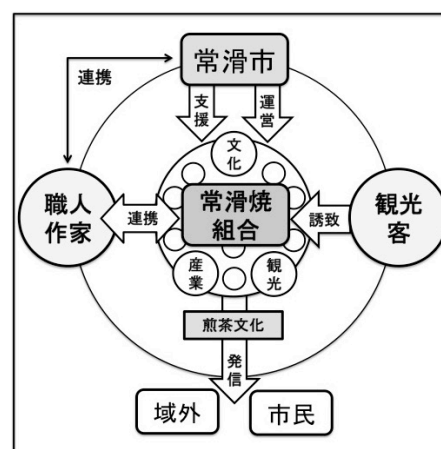


図8：常滑市の主体間関係図

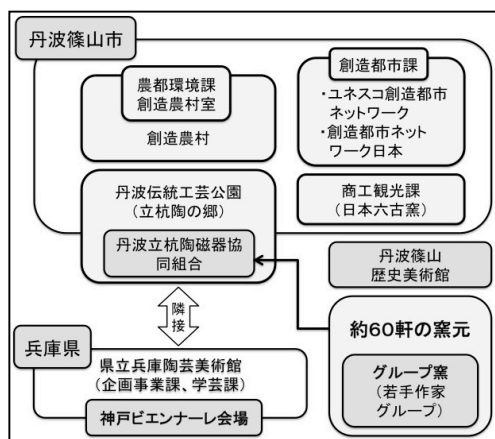


図9：丹波篠山市の組合関係性モデル

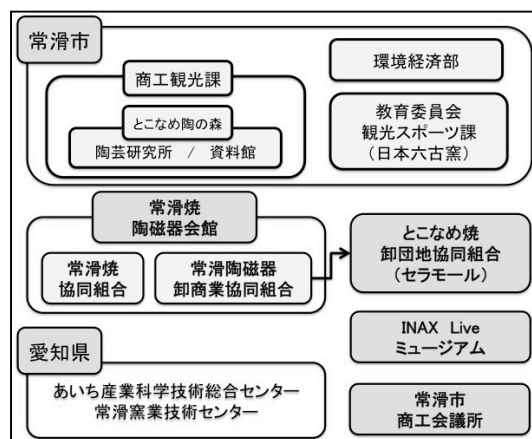


図10：常滑市の組合関係性モデル

6. 考察：丹波篠山モデルと常滑モデルの窯業組合比較から

本研究では、地域の文化芸術や産業政策を担うマクロな領域と、職人や作家の日々の実践や地域イベント、生活文化産業の現場などのミクロな領域の中間に存在するメゾな領域で両者を繋げる機能と役割を担っている窯業組合について、二つのモデルを構築した。

丹波篠山モデルと常滑モデルを比較すると、丹波篠山モデルでは、組合という組織体は単一であ

り、従来の土の管理、焼物の流通、ブランディングといった組合の機能のみならず、市の創造都市政策から創造農村政策といった、マクロな領域から若手窯業グループを生み出すなど、ミクロな領域まで幅広く窯業に関する業務を担っていたことであった。一方、常滑モデルでは、土の管理や卸、展示販売やブランディングなどに関する様々な機能を幾つかの組合に分散し、それぞれの役割を分担している事がそれぞれ特徴的であった。図6で整理したように、集団化した生産形態（A群）である丹波篠山市では、単一型組合モデル、個人による生産が多い生産形態（B群）である常滑では分散型組合モデルであったと言える。これについて、今後は、生産現場や流通過程の側面から、それらモデルが持つ特徴が、何を意味し、地域の創造性をいかに高めているのかについて、より詳細な現地調査を行いながら明らかにしていきたい。

—— 参考文献・URL ——

- ・旅する千年・六古窯公式サイト <https://sixancientkilns.jp>（2019年6月30日アクセス）
- ・佐々木雅幸・川井田祥子・萩原 雅也著、編集（2014）「創造農村：過疎をクリエイティブに生きる戦略」学芸出版社

AI はどのように社会をかえるか—公共財としてのAI

How AI changes our society?

- A perspective from a view point of treating AI as a public good

稲葉 陽二 (日本大学)

Yoji Inaba (Nihon University)

本稿では稲葉 (2018) を踏まえて、ジェレミー・レフキン (2014) が提唱する限界費用ゼロ社会の含意を検討したのち、筆者のグループが 2018 年に実施した WEB 調査の結果を紹介し、今後の政策的含意を検討する。

1. 先行研究 AI と経済との関係、その含意

1.1 井上の AK 型生産関数

以上は主に米国における労働市場の変化を説明するものであったが、井上 (2019、2017、2016) は汎用 AI の影響に絞って、AI の経済への影響を分析した AK 型生産関数による「純粋機械化経済」を呈示した。その論点は稲葉 (2018a) に要約してあるが、一般に用いられるソローの成長モデルでは定常状態では一人当たりの成長率は技術進歩率に規定されることになるが、井上は生産関数から L を除いた AK 型生産関数を提唱し、一人当たりの Y の成長率 (生産性の成長率＝一人当たりの所得成長率) ではなく、経済全体が技術水準 A に基づいて指数関数的に増えていくモデルを呈示した。資本が技術進歩により自己増殖していくので、労働に完全代替の資本を持つ国の経済成長は指数関数的に拡大する。この汎用 AI が一般化する点を井上 (2017) は「第 2 の大分岐」と呼び、そうした資本を持たない国、つまり AI 技術の導入に遅れた国は AI 先進国に大きく遅れをとり、国家間の格差は拡大する可能性を指摘した。この点に関連し稲葉 (2018) は、AI 開発に遅れをとった国は AI による雇用への悪影響を緩和する施策の財源さえ不足するかもしれないと危惧している。加えて、すでになど多くの論者によって指摘されている点であるが、一国経済の中でも、資本を持つものと持たない者との間には、大きな経済格差が生まれそれが時間の経過とともにいっそう拡大する (井上 2015、柳川 2016)。つまり、一般的な成長理論からみても経済格差は国家間でも、国内でも拡大する。

1-2 AI 論者の視点

経済学者であり AI 学者でもあるロビン・ハンソンは、その著書『全脳エミュレーションの時代』のなかで、特定の個人の脳を再現して汎用人工知能が普及した世界を描いている。(Hanson:2016、邦訳 2018) そこでは、どんなに優れたスキルをもつ汎用人工知能でもコピーが大量につくられ、労働供給は職種を問わず大幅に増加し、賃金プレミアムを享受していた職種でもそうでない職種でも押しなべて賃金は最低生存水準にまで落ち込み、その結果、賃金格差は縮小すると述べられている。(邦訳上巻 230 頁)

1-3 AI に関する 7 つの仮説

稲葉 (2018) では、前節で要約した Hanson(2016) の「賃金プレミアムを享受していた職種でもそうでない職種でも押しなべて賃金は最低生存水準にまで落ち込み、その結果、賃金格差は縮小する」との記述を踏まえると以下の仮説を呈示した。

仮説 1. AI も一般の資本財と同様に限界費用の観点からとらえることが可能である。高度なタスクをこなす特化型 AI でもソフトウェア型 AI はコピーが容易であり、限界費用がゼロに近づき専門職が行ってきたタスクも容易に AI に置換される、専門職のソフトウェア化が生じる。

仮説 2. 一方、ソフトウェアの行ったタスクの成果を社会に結び付けるインターフェイスとしての

ハードウェア（たとえば人型ロボット）を必要とする機械型 AI はコピーがソフトウェア型 AI ほど容易でなく、限界費用が正であり続け、ソフトウェア型 AI のそれを上回る。

仮説 3. したがって、専門職でも弁護士や裁判官、検事、データだけで診断を下す医師などのハイスキル高所得タスクはロースキル低賃金タスクよりもむしろ早く AI に置換され、雇用への影響は従来のロースキル低賃金タスクよりもハイスキル高所得のタスクに対してより大きく表れる。

仮説 4. ハイスキル高所得タスクの賃金は大幅に低下し、ロースキル低賃金タスクの賃金は機械型 AI の限界費用に規定され継続されるため、両者の賃金格差は縮小する。

仮説 5. 自然人の雇用は機械型 AI の限界費用を下回る範囲で生じるが、自然人の労働供給量は労働者の選好関数の違いにより労働市場から退出する者と居残る者との二極化するが、雇用は必ずしも減少するとは限らない。

仮説 6. ソフトウェア型 AI は製造の限界費用はゼロとなれば、公共財となるため、知的公共財としての国際的な管理機構を必要とする。

仮説 7. AI は基本的に早い者勝ちで勝者一人勝ち型技術である。

1.4 仮説の含意

稲葉（2018）では上記の仮説について、以下の4つの政策的含意を呈示した。

- ① 従来経済学では ICT の影響を、ルーティンワーク対ノンルーティンワーク、ハイスキル対ロースキル、ととらえていたが、AI 普及の影響を考えるうえでのキーワードは「コピーの容易さ」である。
- ② AI の普及により労働タスク間の報酬（賃金）格差は縮小する。ただし、AI 所有者と非所有者との資産・所得格差は拡大し、退職引退を選ぶ労働者も増える。
- ③ AI が勝者一人勝ち型技術とすれば、国家間の経済格差も拡大する。弱者支援のための施策（たとえばベーシックインカムを提供）すら実施できない国も出てくる。
- ④ AI が提供するサービスは、公共財として公的機関の管理が必要となるものもあり、その独占禁止の観点から一方でビックデータの管理について国の規制が必要になる。

2. 社会関係資本と AI の関連

2.1 コモンズの視点の検討

稲葉（2018）は AI 普及の経済的含意をマクロとミクロ視点から考察したが、以下ではそれを踏まえて、社会関係資本と AI との関連を検討する。

Refkin（2014=2015）は、技術革新により限界費用が限りなくゼロに近づく一方で、技術革新が進む世界では技術・情報の共有が進み、WEB 上に新たなコモンズがうまれており、その運営には、社会関係資本が不可欠であり、かつ、これらの新しいコモンズが社会関係資本を醸成すると主張している。

さらに Refkin は、社会関係資本が存在していれば、WEB におけるハイテク世界の統治システムとしてコモンズが機能しうるし、かつ社会関係資本はハイテクのコモンズを創造するために不可欠であるという。このハイテク開発の分野の活動をコモンズとしてとらえるという彼の議論の根拠は次のようなものである。すなわち、今日成功している技術進歩は、限界費用をほとんどゼロにまで押し下げて、多くの財・サービスを公共財として扱うことが可能になっている。

限界費用がほとんどゼロの世界の代表的なものは、コピーが容易な楽曲、映像やソフトウェアなどの世界であり、AI も例外ではない。Refkin は楽観的に淡々と記述しているが、この世界はフリーライダーの世界であり、市場メカニズムが機能しない世界である。つまり、Refkin は市場メカニズムが限界に達しており、それに代わるガバナリングシステムとしてコモンズシステムを提唱している。Refkin の結論に飛びつく前に、もちろんより詳細な分析が必要であることは疑いない。し

かし、リフキンが社会関係資本研究の新たな視点として、今後の分析に値するとても重要な提案をしたと理解しよう。

2.2 AI への懸念と社会関係資本

AI の普及に関しては、すでに様々な懸念が表明されている。本節では筆者らが 2018 年に実施した WEB アンケート調査 (n=6000) に基づき AI 化への懸念と社会関係資本の関係について考察する。予備的な考察では、構造的な社会関係資本 (団体参加や友人・知人や同僚などとの付き合い) が高い者ほど AI については否定的であるが、信頼などの認知的社会関係資本の高い者ほど AI の導入に肯定的であり、AI の導入にあたっては、認知的な社会関係資本が促進し、構造的な社会関係資本がチェックする機能をもつようにみえる。

3. 結論

筆者の論考も含め経済学からみた先行研究は、AI により格差の拡大は不可避のように見える。過度に悲観論に走る必要はないかもしれないが、今後の変化の負の側面を軽減するためには、AI がもたらす成果の分配を考慮することが重要である。そのためには、AI の公共財としての側面を鑑みれば、すでにネット上に多数存在する AI の成果を共有する新たなコモンズを適切に維持管理するために社会関係資本を利用することも重要であろう。

(参考)

稲葉陽二(2018)「研究ノート AI はどのように職を奪うか—経済学の視点からの一考察—」『政経研究』第 55 巻第 2 号, pp.15-31.

稲葉陽二 (2019 印刷中)「社会関係資本研究の新たなフロンティア」『社会学年報』第 48 号、東北社会学会。

稲葉陽二 (2019 印刷中)「AI の影響に関する意識調査」の概要と予備的分析」『政経研究』第 56 巻第 3 号。

井上智洋 (2015)「機械が人間の知性を超える日をどのように迎えるべきか?—AI と BI」
<http://synodos.jp/economy/11503> 2017 年 8 月 25 日アクセス。

井上智洋 (2016)『人工知能と経済の未来—2030 年雇用大崩壊』文藝春秋。

井上智洋 (2017)「第二の大分岐—汎用人工知能が経済に与える影響—」人工知能学会『人工知能』32 巻 5 号 (2017 年 9 月号), pp.660-664.

井上智洋 (2019)『純粋機械化経済 頭脳資本主義と日本の没落』日本経済新聞社出版。

山本勲 (2017)『労働経済学で考える人工知能と雇用』三菱経済研究所。

Hanson, Robin (2016) *The Age of EM: Work, Love, and Life when Robots Rule the Earth*, Oxford University Press. (小林恵理訳 (2018)『全脳エミュレーションの時代』NTT 出版)

柳川範之 (2016)「経済教室 人口知能は職を奪うか」日本経済新聞 2016 年 1 月 3 日 p.27.

Rifkin, J., 2014, *The Zero Marginal Cost Society: The Internet of Things, the Collaborative Commons, and the Eclipse of Capitalism*, St. Martin's Press. (=2015, 柴田裕之訳)『限界費用ゼロ社会—モノのインターネット>と共有型経済の台頭』NHK 出版.)

連絡先: 稲葉陽二 (日本大学) E-mail: inaba.yoji@nihon-u.ac.jp

勤務先住所: 101-8375 東京都千代田区神田三崎町 2-3-1

電話番号: 03-5275-8639

モリス的ユートピアにおける芸術と労働の関係性について

The Relationship of Art and Work in Morris' s Utopia

○ 梶島利久 東京工業大学環境・社会理工学院修士課程
坂野達郎 東京工業大学環境・社会理工学院

1. 本研究の背景と目的

植物や小動物をモチーフにしたテキスタイルデザイナー、ロマン派の詩人として、また歴史的にはアーツ・アンド・クラフツ運動の提唱者として W・モリス(William Morris, 1834-1896) は語られる。AI、IoT 技術の発達による第4次産業革命と呼ばれる新たな社会が到来する中、仕事の有り様について初期の社会運動家としてモリスの思想についての注目が集まっている。未来社会に向けてあるべき人間像や人々の生活の有様を思考するにあたり、モリスの望んだユートピアはどのように解釈すべきなのだろうか。

モリスは芸術家、社会主義者として「労働における芸術」「日常を美しくする」という特異な関心を持つ。イギリスは1830年代には産業革命をいち早く完了させ、工業発展を遂げ、世界の工場と呼ばれる程の力をもった。しかしその資本主義体制の繁栄には、人口集中による都市生活の悪化や子供や女性への過酷な労働の強要など、さまざまな影の部分が存在した。そうした状況からチャーティスト運動を始めとする労働者運動の活発化し、R. Owen、J. Ruskin を始めとする社会主義思想家が出現した。このような時代を生きたモリスにとって、労働者の生活に目を向けることは必然でもあった。

このような背景を持つ思想家モリスを Naylor(1990)は芸術を通して秩序あるユートピアを描き出すことができた人物として、彼のデザイン哲学や社会主義活動を、ロマンティシズムの影響という視点から論じている。Bevir(1998)はモリスの社会主義思想をロマン主義とプロテスタンティズムピューリタニズムの影響の2側面に着目し論考を展開し、結論として社会主義者としての彼の活動はピューリタニズムに回帰するとした。既存のモリス論は、ロマン主義とプロテスタンティズムピューリタニズムの影響の2側面に着目するものの、どちらか一方に着目するか、両者に着目する場合でも、Naylor のように後者を前者に帰着させるか、Bevir のように前者を後者に帰着させるものと論じられてきた。しかし、両者の関係は、どちらか一方が優位な影響力を持ったのではなく、対等に影響を及ぼし合うことで、出発点となったロマンティシズムとピューリタニズムにはないモリス独自のデザイン思想と社会主義思想が形成されたのではないかと考えられる。本研究ではモリスの思想におけるロマン主義とピューリタニズムの関係に着目し、資本主義に繋がったとされるピューリタニズムの倫理観がなぜモリスの中では社会主義に結びついたのか、また、ロマンティシズムという芸術館が社会主義思想と結びつくことでどのように変質したのかを考察する。

尚、本論においては、世俗内禁欲による社会主義的ユートピアでのよろこびあるもの(=仕事)と、財を得るための手段と成り下がってしまったもの(=労役)とを総括する概念として「労働」をあてて表現するものとする。

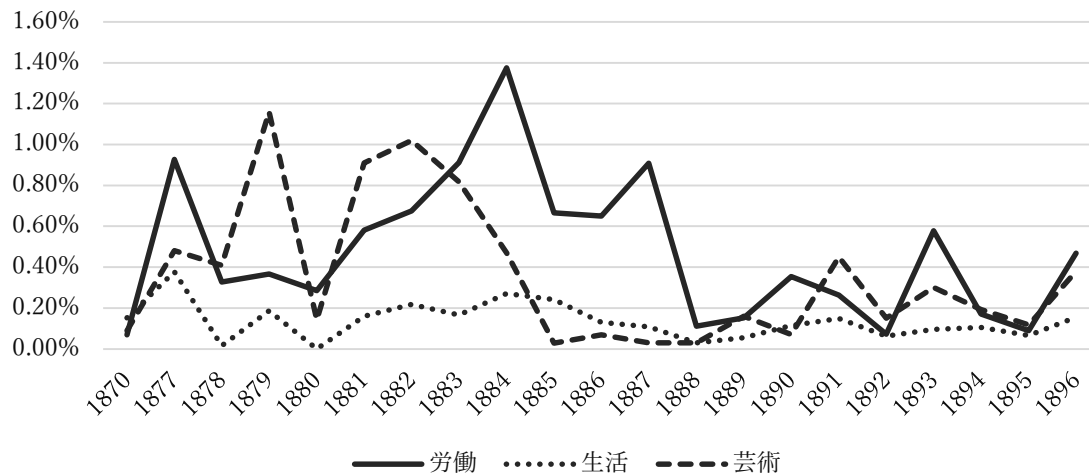
2. モリス著作の整理と傾向の調査

本稿では、『The William Morris Internet Archive』に収録されている本、論文、詩集等計142 著作、に邦訳されている4 著作を分析の対象としている。彼の著作の傾向を捉えるためにロマン主義者、社会主義者に関するであろうキーワード以下のように選定し、前述の Archive の収録されて全著作物を対象に、同キーワードを含む文を特定、抽出した。キーワードについて

ては、(1)労働(work, labour)、(2)芸術(art)、(3)生活(life)、(4)左の(1)(2)(3)のそれぞれに daily, everyday を冠したもの、(5)喜び(pleasure, happiness) (理由は後述) とした。

図1には、労働、芸術、生活というキーワードの年別出現頻度（キーワードの年度ごとの出現数を年度毎の総単語数で除した値）を示したものである。

図1 各キーワードの年別出現頻度



モリスが民主連盟（のちの社会民主連盟）に加入した1883年に着目すると、『労働』の相対頻度がこの時期にピークに達すること、また、それ以前は頻度差があまりなかった『労働』と『芸術』が、その後1888年までの間、『芸術』の頻度が『労働』の頻度に比べて下がっていることがわかる。彼がいかに社会主義活動家として労働や社会への関心が高まっていたかがうかがえる。またこの時期はモリス商会でのデザインの仕事について最も活発に行われていた時期(川端, 2016)と一致していることより、芸術家としても成熟を迎えていたと時期とも言える。1883年を境にモリスは社会主義活動を本格化させるなかで、自身の芸術観と労働観を議論し、整理したと推測される。そこで、1883年の前後の著作に焦点を絞り、彼が芸術と労働に関してどのような言説を残したのか見ていくこととする。

3. 芸術—労働観の特徴

まず、work, labour が登場する箇所を特定し、芸術との関係について考察を行った。その結果以下の2つの関係があることがわかった。

第一は、芸術観と労働観の非分割な関係である。モリスの中で芸術と労働、生活は、現代と対比して中世や過去の世界では芸術によって飾られていたと考えていた(Morris, 1881a)。また、芸術はすべての人間の生活の一部であり(Morris, 1881a)、日常の生活、労働によって生み出される芸術は人間に重要なものであるという(Morris, 1883)。すなわち芸術と労働は常に共存しているべきだと彼は考えていた。第二は、芸術による労働の喜びである。モリスは日々の労働に喜びがなくなれば、労働は惨めになるものと主張する(Morris, 1881b)。中世以前の生活の中に、日々の労働の喜びの中に芸術の進展が見られたことを芸術と労働の理想的関係として提示する(Morris, 1883)。この両者が分かち難く結びつくことで、日常生活の喜びが生まれるというモリス特有の芸術観と労働観を本研究では「芸術—労働観」と呼ぶことにする。

このモリスの「芸術—労働観」は、日々の労働という世俗世界の行為を肯定している点で、ピューリタニズムが労働という世俗内の行為を肯定したことと一致しているものの、ピューリタニズムの世俗内禁欲主義は、現世での喜びは否定するために芸術や消費は否定したのに対して、モリスの「芸術—労働観」は両者は不可分のものと捉えられている点でズレがあることがわかる。

4. ロマン主義的芸術観の修正

この章ではモリスの芸術―労働観をロマン主義の側面から考察するために、広義のロマン主義と、プロテスタンティズムの影響を持つ北方ロマン主義を比較しその影響を検討する。

まず Henckmann(1991)らによれば、広義のロマン主義の特徴は以下のように整理できる。

- ① 反権威、反因襲、反ブルジョアを掲げ、主観的なものを志向する。
- ② 古典主義が設けたジャンルの境界、法則を超えた自由な芸術表現を追求する。

これに対して、Rosenblum(1975)は、18世紀から19世紀前半にてドイツ、イギリスなど北部ヨーロッパのロマン主義芸術家はプロテスタンティズムと結びつき、独自のロマン主義を形成したと述べ、これを北方ロマン主義と呼んでいる。特徴は大きく以下の2つである。

- ① 世俗の世界での神性な個人的体験、感情の喚起を表現しようとした。
- ② 表現上では宗教的なモチーフは使わず、広大な自然や、中世を想起させるゴシック建築といったものを使い、受け手に超自然的な感覚を与えようとした。

以上を踏まえ、芸術―労働観に見られる芸術観と2つのロマン主義との差異及び共通点について検討すると、第一に、大芸術（権威的な芸術）に小芸術（日常生活に根付いた芸術）を対置させた(Morris, 1877)点で、すなわち反権威的な指向を受け手の共感（個人的体験）を表現することで受け止めようとする北方ロマン主義と一致する。しか、モリスにあつては、自然や中世への関心は共通するが超自然の観点ではなく、それらは学ぶべき対象であつた(Morris, 1877)。あくまでも世俗内での共感を芸術に求めている点では、広義のロマン主義の立場に近い。

また、モリス(Morris, 1879)は、当時のロマン主義一派であつた唯美主義者の『芸術のための芸術』という芸術観を批判している。「『芸術のための芸術』という芸術観は、）一見したところ無害のようだが、実はそうではない……」「この派（唯美主義者）のきまりきった宿命的結末は…、その道の達人でさえもが触れることができないほどもろいものになることだろうし、その達人でさえもがついには…、何もしなくなるとにちがいないそして、その結果、悲しむ人さえあらわれないであろう」。さらに、彼は、「…わたしが人びとに理解してもらいたいと願っていることは、…新しい向上階級と新しい墮落階級、すなわち新しい主と新しい奴隷をつくるというようなことを、ほかの誰よりもわれわれはしたくないということである」と語る。つまり、モリスが求めたものは広義のロマン主義のような単なる作り手の主観重視の芸術ではなく、全ての大衆が共感できる芸術であつた。

上記の比較より、モリスの芸術―労働観は、反権威主義的で、古典主義が設けたジャンルの境界、法則を超えた自由な芸術表現を追求する点では広義のロマン主義の影響を受けた思想である。しかし、世俗内での日常生活の根ざした共感を目指しながらも、唯美主義とは一線を画する大衆が共有する普遍的な共感を芸術の根本においている点で、北方ロマン主義芸と広義のロマン主義のどちらとも異なる独自に芸術観を持っていたことがわかる。普遍で共有可能な自然や歴史というものへの関心を持ちつつ、小芸術の可能性に確信を持っていたのはそのためと考えられる。

5. ピューリタニズム的労働観の修正

前章では芸術―労働観における芸術観がロマン主義の影響を受けながらも、どのように修正されたか論じた。この章ではそのロマン主義がピューリタニズム的労働観にどのような変化をもたらしたのか検討する。

大塚(1969)は、Weber が論じたプロテスタンティズムの職業倫理の特徴を以下のように整理している。

- ① 伝統的非合理からの解放：伝統の倫理的束縛に対する、利己主義の自由の、あるいは個人的営利欲の全面的な解放
- ② 禁欲的職業倫理：「世俗的な『職業』に勤しむことが、それ自体、神から義務としてあたえられた使命の遂行にほかならない」

③ 財の重要性：労働により獲得された財について「隣人愛の実践したことの標識」

以上の特徴をモリスの労働観と比較をすると、まず禁欲的生活倫理についてモリスの文中にも質素や素朴、勤労といった概念を見ることができる。だが、「趣味の素朴さ、すなわち、甘美にして高尚なものへの愛を生じる、生活の素朴さは、われわれが切望する新しいよりよい芸術の誕生のために、何よりも、最も必要なものである」というように、いずれもその先にあるのは財獲得の容認ではなく、芸術による喜びがある (Morris, 1877)。モリスは現体制 (資本主義社会) への批判を、すなわち財や利益の追求を批判している。加えて、労働における芸術創造の欲求の充足こそが最大の喜びであるとも述べている (Morris, 1884)。ピューリタニズムの労働観における「隣人愛の実践である財」が「日常の芸術創造による喜び」に入れ替わることで、彼の労働観が成り立っていることがわかる。

6. まとめ

モリスのユートピア思想の根底には外部に依存しない、自己に内在する価値観への確信がある。その価値観は資本主義的な利己中心のものではなく、日常生活での創造的活動を基にした自然の如く調和と普遍性のあるものであった。モリスの提起した価値観が、資本とテクノロジーが一層発達した現代社会においてなお魅力を発信しつづけるのはそれゆえなのだろう。

本稿ではモリスのデザイン哲学、社会主義活動、そして教育論の具体的な展開を語るに至っていない。そうした実践の観点から、モリスのユートピア思想にどのような特徴を捉えることができるのだろうか。またイギリス思想史において、Bevir が語るように、その後の倫理的社会主義の概念に影響を及ぼした人物として評価することができるのだろうか。これらは今後の課題としたい。

【主要参考文献】

- 1) Bevir, Mark (1998). William Morris: The Modern Self, Art, and Politics, History of Europe Ideas, 24.
- 2) Naylor, Gillian (1990). The Arts and Crafts Movement (ネイラー・N 川端康雄・菅靖子(訳) (2013). アーツ・アンド・クラフツ運動), みすず書房.
- 3) Heckmann, Wolfart. G., Lotter, Konrad. (Eds.) (1991). Lexikon der Ästhetik (ヘックマン, W., コンラッド, K. (編). 後藤狷士・武藤三千夫・利光功・神林恒道・太田喬夫・岩城見一(監訳) (2001). 美学のキーワード), pp. 298-299, 勁草書房.
- 4) Morris, William (1877). The Lesser Arts, The Decorative Arts, pp. 10-11, 23, 33, Longmans.
- 5) Morris, William (1879). The Art of the People (モリス, M. 内藤史朗(訳) (1971). 民衆の芸術 梅根悟・勝田守一(編) 民衆のための芸術教育), pp. 50-51, 明治図書出版.
- 6) Morris, William (1881a). Art and the Beauty of the Earth, p. 11, 16, Longmans.
- 7) Morris, William (1881b). Some Hints on Pattern-designing, p. 40, Longmans.
- 8) Morris, William (1883). Of the Origins of Ornamental Art, par. 4, 41.
- 9) Morris, William (1884). Useful Work versus Useless Toil (モリス M. 内藤史朗(訳) (1971). 民衆の芸術 梅根悟・勝田守一(編) 有用な仕事と無益な労役), pp. 113, 明治図書出版.
- 10) Rosenblum, Robert (1975). Modern painting and the northern romantic tradition (ローゼンブラム R. 神林恒道・出川哲郎(訳) (1988). 近代絵画と北方ロマン主義の伝統), 共伸舎.
- 11) 久雄, 大塚(1969). 大塚久雄著作集 第八巻 近代化の人間の基礎, 岩波書店.
- 12) 康夫, 川端(2016). ウィリアム・モリスの遺したもの デザイン・社会主義・手しごと・文学, 岩波書店.